

した変数減少法は、まず、30個の重回帰分析の結果、 $y$ との単相関係数の大きい変数と、独自の役割という観点から $t$ -値の相対的に大きい変数を選択した。これにより選ばれた変数を説明変数として重回帰分析を施し、その中から $t$ -値の大きいものを選び、これを何度か繰り返すという方法であった。あくまで、時間的、技術的制約からの簡便な方法ではあったが、表9に示すとおり最終的には説明変数を10個に絞ることができた。

この予測モデルによると、収益面で貢献する企業像は、1) 決済条件が有利で、在庫負担が軽く経営効率が高く、2) 収益性に劣り、借入依存度が高く、したがって金利負担が重く、3) 借入金に対する現預金は少なく、総資本でみた成長性が高い、ということになる。一方、取引協方面では、1) 在庫負担、総資本回転率において経営効率低いが、現金回収割合は大きい、2) 収益性が高く、資金的余裕があり、したがって現預金水準が高い、そのような企業が貢献することとなるのである。

つぎに、予測モデルの精度を区間誤差でみると、収益貢献度では、60社中55社が $\pm 1$ 区間以内(うち適中は22社)となり、十分満足されるものであった。しかし、取引貢献度では、 $\pm 1$ 区間以内が50社(適中は21社)に

とどまり、さらに、 $\pm 2$ 区間以上が10社と、説明変数30個の場合に比して倍増することとなった。取引協力性の予測式は、説明変数15個が限界であったかも知れない。(重相関係数: 0.83,  $\pm 1$ 区間以内; 54社)

## おわりに

本研究では、取引振りの2つの側面について把握し、その総合評価を行なうことができた。しかし、資金トレースや内国および外国為替など、銀行取引の多面にわたる検討ができなかったことが残念である。今後、その必要性が生じることは必至と思われる。

そして後半では、予測という表現ではあったが、期待されて然るべき取引振りの程度の認識が可能となった。しかし、これが賛同を得るには、サンプルを変えての継続研究が要求されよう。また、実際値と予測値のかけ離れているサンプルの実態調査は、欠かせないものであり、しかも、興味のあるところであったが、資料、時間的制約等から見送らざるを得なかった。このように、私自身やり残したことの多さを痛感している。不完全な研究ではあるが、読者にとって何かの参考になれば幸いである。



## ●政策科学●

6月例会 6月9日(土) 14:00~17:00, 場所: 三菱総研会議室, 出席: 8名。

(1) 研究発表「政策科学へのテトラ思考による接近」(上田イノベーション研究所・上田亀之助氏):  $\times$ 一辺倒などモノ・レンマ(一值的思考)の独断性, 正邪・善悪などディレンマや正反合などトリレンマの平面性, 七不思議などセブタレンマの複雑さに対し, 上下左右・起承転結などテトラ(四值的)レンマのもつ立体思考の効用を唱え, その場合の政策形成体系を提示した。

7月 場所の都合により休会

8月例会 8月26日(日) 15:00~27日(月) 11:30, 場所: 逗子松汀園(合宿), 出席: 11名。

(1) 紹介「国力評価とカントリー・リスク」(防衛研・福島康人氏) ① クライン博士の人口・領土・経済力・軍事力・戦略目標・国家意思など6指標の計を1000点として76年に1位はソ連の523, 日本は144で米・西独につき4位, ② U S ニュース誌の西側7カ国の経済力では日本

は総合1位, ③ヘイナー教授の安全度では日本はスイス, 米国, 西独につき4位, など方法論を紹介。

(2) 研究発表「システム産業の事例研究」(武田薬品・湊晋平氏): 牛丼の成長チェーン吉野屋を取り上げ, 価格固定, 若い店長1人とパートによる構成, 店長優遇と教育重視, 24時間営業と郊外進出, 単品主義・部品の一括購入・味覚研究などシステム化に成功の鍵を求めた。

## ●DP研究会●

研究会解散後2回目のシンポジウムである。大学セミナーハウスで, 昭和54年7月20日, 21日の両日にわたって開催された。前回同様出席者のほとんど全員が発表することとなった。その次第はつぎの通りである。生田誠三(筑波大) 逐次選択過程について, 岸 尚(防衛大) Headwaiter's Problem, 坂口 実(阪大) Information value analysis for the logarithmic investor and gambler, 有水 彊(林業試) 汚水処理と緑化, 小田中敏男(都工短) ファジィ停止時間を有する確率制御過程について, 沢木勝茂(南山大) 不確実性下の資本投資の最適分割について, 中井暉久(阪大) A search game with the modified butterfly-shaped kernel, 中神潤一(千葉大), 蔵野正美(千葉大), 安田正実(千葉大) multi-variate stopping problem であった。

(小田中敏男)